



1985年(昭和60年)
2月号(No. 476)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

UIAA 総会に出席して	佐々保雄……………(1)
創立八十周年記念事業資金	
第二次募金の実施について……………(1)	
海外の山……………(2)	
“韓国の登山界”, “アメリカ山岳会年次総会で感じたこと”	
シンポジウム	
ヒマラヤのエコロジー……………(3)	
日本山岳会の歌について……………(4)	
ドイツ山岳会会長本会訪問……………(5)	
報告……………(5)	
科学研究委, 指導委・青年懇談会	
科学委紅葉探索山行講義要約……………(6)	
「紅葉・落葉・腐葉」(近田文弘)	
図書紹介……………(7)	
「写真集 南アルプス」ほか	
東西南北……………(8)	
特報! 祁連山脈登山許可取得……………(8)	
図書受入報告……………(9)	
八十周年記念募金応募者ご芳名……………(10)	
会務報告・ルーム誌・会員移動……………(10)	
お知らせ……………(11)	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせ電話

234
六六五九

UIAA ソウル総会に出席して

佐々保雄

UIAA (Union Internationale des Associations d'Alpinisme) すな

わち国際山岳連盟の一九八四年総会、十月の十四日から十七日の四日間、大韓民国ソウル特別市のタワールホテルで開催された。この大会は四十七回目のもので、加盟国

川崎社長とともに韓国山岳会より招かれて参加した。第一日には参加者の登録の後、韓国山岳会主催のカクテルパーティが開催された。韓国側を入れると三百人近く集まり、盛会であった。

五十二カ国のうち、ベルギー、カナダ、西独、ギリシャ、インド、イラン、イタリア、日本、韓国、ネパール、オランダ、ニュージーランド、パキスタン、ポーランド、メキシコ、スペイン、スイス、英国、米国の十九カ国の代表が出席した。ソ連と中国やチェコスロバキアは招待したが不参の由であった。

日本代表は日本山岳協会の丹部副会長で、私も「山と溪谷」社の

第二、三日は理事会や各委員会が行なわれたが、その間、一般参加者や同伴者はソウル市内外の観光の案内をうけた。第四日は終日総会が開催され、公用語は英語と仏語の二カ国語であった。会には韓国山岳会の李会長の挨拶に始まり、連盟会長ボーシュ氏の開会の辞では、従来ヨーロッパで催されて来たこの会議が、先年のカトマンズに続き、アジアで開催されたことの意義を述べた。

創立八十周年記念事業資金

第二次募金の実施について

昭和六十年を迎え本会は創立八十周年となりました。ご高承の通り本会ではこれを意義あるものとすべく、会員各位のご賛同を得て各種事業を計画し、昨年から着手しており、既に実施いたしましたカンチエンジュンガ縦走、一部地域における記念集会等相応の成果を収めつつあります。またこれら記念事業所要資金確保のための募金につきましても、会員各位の多大のご協力を得て目標額貳千萬元に今一步のところに迫っており、深く感謝いたしておる次第であります。即ち昨年四月の募金開始以来、年末までに一、二二一名(在籍会員の三〇%)の方々がら壹千六百貳拾萬円余(目標額の八〇%)のご応募をいただきました。

しかしながら、かねがね申し述べておるとこ

従いまして、会員の過半数の応募を期待し、目標未達額四百萬元について第二次の募金を実施することといたしと存じます。募金要領等については昨年実施いたしました内容(一口五千元等)と略同様であります。別途会員各位全員に対し依頼状の送付を計画しております。第二次募金についてはその殆どが、今回事業の主眼目であり、山岳特別基金(仮称)に充当される予定であり、是非とも目標を達成し、本基金の充実した発足を図りたいと存じております。

つきましては特に未だご応募をいただいていない会員各位におかれては本趣旨に対しご理解を賜わり、一口になりともご応募をいただき、また既にご協力を賜りました会員各位におかれまして、なお一層のご支援をいただければ幸いです。以上

創立八十周年記念事業委員会

みんなで八十周年記念事業を成功させよう!

議事や報告では、この一年間の行事の報告と予定、会計の決算と予算が承認された。委員会報告としては安全委員会の事故総計、登山具製作者に対する協力と、会の検定に合格した用具の承認証票の問題。医療委員会ではロンドンにデータセンターを設置すること、シャモニでの第一回国際会議が盛会且つ有益だったこと、将来これを定設化する動きがあること、そのための経費は少ないことなどが述べられた。また探検委員会では、教育、技術、情報などのデータセンターの要、諸国の未開放地域の問題や入山許可の簡易化の問題が論ぜられ、自然保護委員会では特にネパール山地の荒廃、廃棄物処理、焚火に代る燃料などが話題になった。更に理事会委員には従来の西独、ベルギー、スペイン、米国、英国、スイス、イタリア、日本、パキスタン、オランダ、ポーランド、チェコスロバキア、フランス、カナダの十四カ国に、インド、ネパール及び韓国が投票により新たに加わったこと、また次回にはイタリアのベニスで、次々回は西独のミュンヘンに決ったことなどが報ぜられた。また中華民国登山協会は会員として加入したい希望がある旨、同会より派遣の周文氏より申し出られたが、中国との関連もあって、オブザーバーとしての参加が認められた。

最後に、次の会長として前スイス山岳会長のスガランチニ氏が推され、長年会長を勤められたボーシニ氏に感謝の意が述べられた。

このUIAAは一九三二年の創立以来、一九四〇〜四六年の七カ年が大戦のため開かれなかった外、毎年欧州のどこかで催されて来た。目的とするところは登山一般に関する根本問題の解決、特に各国山岳会の協力と情報交換、登山用具の検定、登山者、特に青年層の育成などにあり、政治性を排除することを特色としている。会最初はヨーロッパの国々の代表登山団体により構成されていたが、戦後、登山の振興とともに、他の各国も会員として認められ、現在五十二団体は会員となっている。但しこの中にはオーストリア、カナダ、イタリア、韓国、ポルトガル、スエーデン、スイスのように一国で二つ加入している国もある。但し投票権は一国一票である。

開期中、韓国がこうして大々的に催したのに、何故、登山の盛んな日本で総会を引き受けないのかとの質問をしばしばうけ、また一国一会と限らないのだから日本山岳会も会員になって、世界の登山界のために貢献してほしいとの希望も度々聞かされた。これをこの会に出席した結論として記して置きたい。

海外の山

韓国の登山界

このところヒマラヤでの活躍が目立つ韓国の登山家たちが、一九八四〜八五年冬期の高峰登山に注目すべき成果をあげている。

まず十二月七日、アンナプルナーI峰に挑んでいた韓国シルバー・リック山岳会隊の女性隊員キム・ヨンジャ(三二歳)がシェルバ四人と登頂に成功した。シェルバたちとともになぜ女性一人だけがアタッカーになったのか、「四人のシェルバ」の中に男子隊員も含まれていたのか、ネパール観光省の発表はくわしい状況を伝えていないが、下山途中七七〇〇付近でシェルバ二人は強風に飛ばされ、死亡したという。

アンナプルナーにはこのほかに南壁ルートをめざす日本の群馬岳連隊、北壁(西面)からの登頂をねらうフランス隊がいたが、韓国隊はこの二隊に先がけ北壁東面ルートからの登頂をなしとげた。今冬のネパール・ヒマラヤ初登頂である。冬の八千峰に女性がつたことすれば画期的なことで、詳報が待たれるところだ。

次いで九日には韓国冬期ジャヌー遠征隊のキム・キハン隊長と二人のシェルバがクンパカルナ、つまりジャヌー(七七一〇)に南西稜から登頂した。ジャヌーの冬期登頂は初めてで、ヒマラヤ経験者の少ない同隊が予定より六日も早く成功をおさめたのは、十二月一日の冬期登山開始日以前にスピーディーに下部ルート工作を進めていた結果とみられる。

このほか十三人から成る韓国エベレスト隊が十一月二十四日ベース・キャンプを設け、東南稜ルートから登攀(途中で断念)、マナスル(八一九三)、ガンガプルナ(七四五五)にもそれぞれ韓国隊が果敢な挑戦を続けた。

「十年か二十年前の日本と同じ」という言い方を、韓国隊のヒマラヤ登山について日本人登山家はよく口にするが、そうではないと思う。私たち日本人が十年、二十年の間に学んだヒマラヤ登山の技術を、韓国の登山家たちは、この三、四年か、せいぜい五、六年の間に多分完全に身につけてしまったのではないかと思う。

いまや韓国の登山家たちは一先鋭的な女性クライマーを含めて日本の登山家たちに勝るとも劣らない価値ある登山活動を積極的に進めている。彼らはヨーロッパ・アルプスの三大北壁を完登し、アメリカのヨセミテの困難な岩場を攀じり、いまヒマラヤ八千峰の冬期登山に挑戦している。一九七一、七二、七六年とたて続けにマナスル攻撃に失敗した当時の苦い体験(結局八〇年に登った)が、この二、三年急速に花を開かせたともとれる。

もともと韓国人は、日本人以上に山々と親しんできた民族である。国土の七〇%近くを山々が占め、市民が四季折々山を訪れる頻度はきわめて高い。その高度は二千級に限られるものの、町から意外に近い所に、変化に富んだ岩場、谷、森がある。

ヒマラヤへの進出があまりに急ピッチであったために、冬期のネパール・ヒマラヤだけで五隊も送り出した韓国の実力は過少評価されてきたきらいがある。東アジアの隣人が今後どんな登山活動を展開するか、さらに注目したい。

(江本嘉伸)

シンポジウム

ヒマラヤのエコロジー

日時 十月二十七日(土) 午後一時～八時

会場 渋谷区勤労福祉会館
主催 日本山岳会、科学研究委員会

本年度(第三回シンポジウム)は右の標題で行なった。本年はパネル方式で行ない、世話人に川喜田二郎会員をお願いした。講師パネリストとしては、川喜田二郎、小野有五、中島暢太郎、金井弘夫、高遠宏、春田俊郎、滝口正三、渡辺兵力の諸氏(パネル第一回発言順)。なお九月八日に川喜田、渡辺(桂)、中島、瀧口、高遠の諸氏による予備討論が行なわれた。この予備討論を基礎に、川喜田氏司会のもとに全パネラーに短い話をして頂き、それをもとに討論が行なわれた。パネル方式のためシンポジウムの要約は困難であるが、予稿集をもとに概要を述べておく。

川喜田二郎氏 ヒマラヤ地域についてのエコロジック的観点からの基礎診断作業が必要だが、新しい調査法、技術、着眼点などについての検討、環境保全と開発との関係の問題点を明らかにしたい。

小野有五氏 「ヒマラヤの地形、地質、生態系」の関係を要約、グレートヒマラヤ、レッサーヒマラヤ、インド平原の地形的三区分とそれに対応した生態系との関係について述べられた。

中島暢太郎氏 「ヒマラヤのエコロジー」と気象、気候の立場から述べられた。北側の大陸性気候と南側の海洋性気候をヒマラヤが分けていること。偏西風の南北方向の季節変動、モンスーンの季節変動がヒマラヤ周辺の規則的気象変動と異常な気候変動を生ずること。ヒマラヤ周辺の降水量変動率は日本付近より大きい。

気候と住民の生活との関係については山中和周辺との区別があること、雨季と乾季の差、極寒季と温暖季の差が大きいことが生活のリズムに影響する。ヒマラヤ山系の存在はモンスーン時の雨雪、冬の季節風による雪を増大させ、ヒマラヤ周辺乾燥域にまで、川や地下水として安定な水資源を供給している一方、洪水による気象災害の原因ともなっている。ヒマラヤ域の豊富な水資源は自然エネルギー開発に大きな可能性をもつ。

金井弘夫氏 「地被の回復」、異なった生活・習慣をもつ人々が互いに理解し共存し合うためには、一方の基準、考え方を他におしつけなことが大切である。人間はこの

アメリカ山岳会

年次総会で感じたこと

坂下直枝

十一月末、ロサンゼルスに仕事で出掛けたので、十二月一日、二日にオークランドで行なわれた、アメリカ山岳会(AAC)の年次総会に出席することができた。

このミーティングは、いわばAACの年次晩さん会に匹敵するもののだが、内容そのものには、随分違いがある。会議は朝八時から二時間で片づけてしまい、あとは昼食のための休憩を除けば、夜の十一時まで、遠征やクライミングに関するスライドと講演をぶっとおし行なうものである。会場には、会員のみなならず、招待された有名クライマー達、講演に興味のある一般人もいて、非常ににぎわいだった。プログラムの、チャ・オユーの女性隊、二回にわたるチヨモラン山北壁、そして、ラカボシなど、一連のアメリカ人によるヒマラヤ遠征と、アメリカを代表する岩場、ヨセミテの王者と呼ばれた、ロイヤル・ロビンズの司会による、エルキャピタンの登攀をめぐる、ウォーレン・ハーディ

ング、ジョン・ロング、リン・ヒル達の話があった。そして、ディナーの後は、イタリアからの特別ゲストとして、ワルテル・ボナッティが「大いなる山々の日々」という演題で、三時間にわたる講演を行なって終了した。ディナーの前に、この一年間、最も活躍した登山家として、フリー・ソロ(難しい岩場をザイルをつけず単独で登ること)の分野で活躍した、ジョン・バーカー、女性のロック・クライマーとして、おそらく世界一といわれるリン・ヒルの二人が表彰された。ジョン・ロスケリーの「AACは、登山を実践していないアームチェアの中に牛耳られている」とか、別の有名登山家の「ヤッピー達にAACは占領されてしまった」とかの鋭い批判もあるのだが、AACの選考委員会が、異論はあつたにせよ、遠征のクライマーではなく、雪も氷も登らない純粋なロッククライマーのこの二人を選んだことに、現在のAACの柔軟な姿勢がうかがえるような気がする。すでに英国山岳会(AAC)が、完全に現役登山家から遊離して、過去の栄光を語り合う老人サロンとなつてしまふ、英国登山評議会(BMC)にすっかりその地位を奪われてしまったのとは、まさに好対照だ。

海外の山

間まで地球の資源は無限であるとしてものごとを考えた。最近になって、それが有限であることに気がついた。熱帯における森林の減少やヒマラヤの荒廃を、そこに住まない人々が深刻な問題として議論するのは、それが地球規模の影響をもつことを察知しているからで、われわれのエネルギー消費が大きくなりすぎたため、この事態を招いたという反省がまず必

要である。ヒマラヤの荒廃の直接の原因は人口増加である。耕地は増加したが、再利用されない裸地もまた増加し、地被の回復が行なわれず、これが土地崩壊の原因となっている。山地荒廃の当面の対策は地被の回復である。この対策

には木を植えることになるが、いわゆる「植林」が適当かどうか一考を要する。生長が速く、農民が直接利用する飼料、燃料などに役立つ樹種を選定する必要がある(はんの木など)。樹木の生長保護のため、住民の理解のもとに放牧

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

の禁止地区を設けることも必要である。

春田俊郎氏 「カトマンズ周辺の森とチョウと人」約五十年前、F.M. Bailey がカトマンズ周辺の山、森林の状況、二百種のチョウの調査をしている。一九六三年、春田が調査した時は東の Mahdeo-Po-Ikari には森らしいものはなくなっていた。五十年前、多数生息していたテングアゲハは一匹もみられなかった。次に Sheopuri 山の破壊が進んでいる。ここには僅かながらテングアゲハが生息している。ここは貯水池の保全のため政府によって保護委員会がつけられている。Nagarjung 山は昔からの Royal Forest で、最もよく保護されている。Pulchowk 山は最近採石場がつけられ、鉱山の採掘も始まろうとしている。カトマンズ盆地は川が一本、しかも、水源まで一・五キロメートルしかない。カトマンズの水問題は深刻である。

高遠宏氏 「ネパールの土壤侵蝕」人口圧のため森林の減少が年率一・七％で進んでいる。反すう家畜が一五六〇万頭、人口より多い。この家畜飼料源をどこに求めるか大問題で、飼料畑用耕地はない。雨期は草地、飼料木などで充足、乾期が問題である。

ネパールの四大河川により運び去られる土壌二・四億立方メートル。それで失われる窒素、リン、

カリの肥料要素は三四万トンと推算されている。

またヒマラヤ山系北側、中国チベットの土壌利用、保全などについて中国科学院の資料による紹介があった。

滝口正三氏 「ヒマラヤの自然保護」、ネパールの自然保護活動、国際自然保護連合の「世界保全戦略」の指針、実施要旨の紹介があった。

渡辺兵力氏 社会学者の立場からのこのシンポジウムについてのコメントがなされた。今回のパネルは自然科学、技術論の問題に比重がかかり、社会科学、文化論的問題意識が不十分である。JAC 科学研究委員会としてどういう立場でこの問題を討論し、研究するのがよいか、検討する必要がある。ヒマラヤ地域の荒廃化は登山活動にとっても深刻な問題である。

なお基礎用語概念についての提案をしたい。「地域生態系」、ある「地域」に「生活」している住民とその環境との関係の一つの系としてとらえるときの思考の枠組を「地域生態系」という。

以上は予稿集からの私の多分に主観の入った要約であるが、パネル討論としていろいろの問題が取り上げられた。思いつくままその二、三をしるすと、ネパールとブータンのエコロジー的観点からの相違と共通点、生態系の保全と開

日本山岳会の歌について

水野 勉

昨年十二月発行の「山」に載った辻莊一氏の「日本山岳会の歌を」という文章を読んでいささか感じるころがあった。

一口にいえば、日本山岳会の会歌なるものの制定には反対である。それだけではどうしてもやめてもらいたいと思う。

辻氏の文章の前半部分、つまり会歌が必要だという理由としていろいろと述べられていることはそのとおりだと思う。たとえば、歌が「近代人がややもすればおちいりやすい孤独感、疎外感からの解放」とか「歌は社会の団結の産物であり」とか「ひとつの歌をおおぜいで歌唱するとき、たとえ瞬時たりともその人たちの心は一致した方向にむけられる」という認識など、そのとおりだと思う。

ただ、私は、それ故に会歌制定には反対だというのである。会歌ばかりでなく、国歌や校歌の制定などにも反対である。ある考え方、イデオロギ―で一つにまとめてしまおうということに強い抵抗をおぼえる。オリンピックのときの国歌や国旗などには涙を流す人もいであらう。ヒマラヤで登頂の際に国旗を掲げて感激した人もいであらう。あるいは海外旅行へいけば誰もがいきさかナシヨナリストになることもあらう。しかしながら、国家意識昂揚が望ましいものとは思えない。少くとも、私たちが学んだ近代思想はそれを否定する。おおぜいの人間がある一つのものにまとまるというのは、生産第一主義には必要であらうが、少くとも趣味の世界、思想の世界では全く危険である。

「孤独感とか疎外感からの開放」というのは、エリッヒ・フロムのいう「自由からの逃走」ではないだろうか。四千人もの人間が同じ考えを持って行動するなど、私はこわい。というより危険である。それはすでにヨーロッパにおいて、日本において、一九三〇〜四〇年代に経験したことではあるまいか。

一つに団結して進むことは、ある目的を達成するには有効な方法である。それによって日本経済の向上もあり、ヒマラヤの一時期の輝かしき登頂もあつたであらう。しかし、いくら有効だからといっておおぜいの人間が一つにまとまるなどすべきではないと思う。特に趣味の世界においてはそうである。登山というあそびはすぐれて個人的なものである。日本山岳会においても、いろいろの考えの人が集まっており、登山の方法一つをとってあげてみても、それぞれ違った方法を持っているであらう。それでいいのである。会報でも、「山岳」でもいろいろの立場の会員が自由にその考えを発表してこそ、わが日本山岳会なのである。百花繚乱こそぞましいのである。きびしい管理社会に生活しているからこそ、趣味やあそびの世界では、そうした一様性あるいは統制から自由でありたいと願う。

少数のグループがそれぞれ好きな歌を作った歌うのは喜ばしいことかもしれない。旧制高校の寮歌などもすべてそうした性格のものであつた。日本山岳会において今まで会歌なものが作られていなかったことをむしろ評価したのである。八十年を記念して会の歌を作るなどぜったいに反対である。作るなら、山の歌を作ればいい。それは個人が自由にやるべきであらう。会としてやるべきことではないと思う。

諸兄のご意見をお聞きしたい。

発、観光との関係をどうとらえるか。環境保全に積極的に役立つ開発もあるのではない。さらに技術的な問題としてローカルガイド組合を育てる必要があること、登山隊やトレッカーの報告には最少限度、「いつ」と「どこ」の記載を必ずして欲しいこと、エコロジー的観察を依頼するための手引き書のようなものを考えたらどうかなどが指摘された。

科学研究委員会としてのPR不足で参加者の数が少なかったことは残念で、長時間熱心に討論を下さったパネリストの方々にも

ドイツ山岳会々長

メルツ博士夫妻本会訪問

鈴木 郭之

韓国ソウルで開催されたUIA A (国際山岳連盟) 総会に出席の帰途、ドイツ山岳会々長、フリッツ・メルツ博士夫妻が当会を訪問された。ドイツ山岳会は四十万人の会員並びに三百近い山小屋を有する世界最大の山岳会で、また、青年懇談会の二次にわたる青年交換登山、個々の会員の頻繁な相互訪問、文書の交換、岡沢祐吉理事の西独招待等を通じて、本会とは最も密接な関係にある。

今回は、同博士夫妻の他、ミュンヘンにある欧州最大のスポーツ店シュスターのシュスター夫人並

申訳けなかったが、シンボジウムの内容は充実したものであったと考えている。なお当日配布した予稿集の残部がありますので、ご希望の方は日本山岳会科学研究委員会宛七百四十円(送料込)を添えてお申込み下さい。また当日の発言はテープに収録、川喜田二郎会員が保管されている。

出席者 パネリスト八名(前出)及び五百沢智也、遠藤京子、松田雄一、桐生律枝、中村あや、中村純二、斎藤かつら、千葉重美、梅野淑子、大木淑子、小西奎二、高橋詢 (高橋 詢)

びにショーバー夫人が同行された。本会では、昨年十一月十九日に歓迎会を開き、雨天にも拘らず、佐々会長、山田副会長始め、多数の会員が出席された。また、この歓迎会には、ドイツ大使館から、旅行中で欠席をされたマッション公使の代理として、シュタンツェル書記官夫妻が、また元在日ドイツ商工会議所会頭でドイツ山岳会々員のアインゼン氏が出席して敬意を表された。当日、メルツ会長よりドイツ山岳会がオーストリア山岳会と協同で作成したヒマラヤ並びに南米の地図、DAVの

ネーム入りのジョッキ、永年会員章、ハーケン等、またシュスター夫人よりはシュスター社製の最新のアイゼンを本会に寄贈された。

翌日は、神崎忠男理事や鈴木敦子嬢の案内で都内観光、二十一日は鎌倉、箱根を廻り、中村テル名誉会員の幹旋で御殿場の東山荘に泊り、神崎忠男、伊丹紹泰、大谷の諸氏が合流、翌日は快晴の富士山と富士五湖をめぐる、本会々員浅田治男氏の経営する河口湖の「季節風」に私と共に泊った。翌

二十三日は前号会報に掲載されたように、松本着、信濃支部長蒲生明登氏の出迎えをうけ、念願の上高地に入り、田中副支部長、並びに岡沢理事の案内で秋の上高地を楽しまれた。二十四日は、上高地を立ち、京都に着き、斎藤淳生、ドクター等の歓迎をうけ、翌二十五日は、高田光政氏が終日京都を案内した。短期間の駆け足旅行ながら、各地での会員諸氏の並々ならぬ努力により、会長夫妻一行は、日本に対し、最高の印象をもって帰国された。メルツ会長は、

従来にまして、本会とのより密接な交流を望まれ、特に、青年交流登山の復活、ドイツ山岳会のトレーニング隊の訪日、二年後のミュンヘンにおけるUIA A総会への招待等、数々の提案をされた。今回は、各地で色々な形で会員諸氏のお世話にあずかったが、他に、終始、車を提供して下さいった

報告

小原俊、藤井正彦氏に感謝の意を表したい。

高ドツキヨ 紅葉探索山行 科学研究委員会

今年度の探索山行は「紅葉」を対象に、静岡大学の近田文弘助教授を講師に迎え、沼津からしか山岳会の行届いたお世話の下に実施することになった。

十一月十日(土) 十五時二十分富士駅には参加者全員が一人の遅刻もなく集合、マイクロスコープで山梨県上徳間の坂口荘に向かった。車中、近田先生から静岡県の植生についての説明を受ける。富士川の支流福士川にはいると、別稿講義(講義内容は六ページに掲載)にあるように、今年は特に美しい紅葉が溪流を鮮やかに彩り歓声が上る。宿につくと、高橋科学研究委員会委員長の挨拶に引き続き、スライドを用いて近田先生の講義が行なわれた。七時から坂口荘の望月源吾翁の料理法説明つきでヤマメの刺身や塩焼、山菜料理や手打そばなど豪華な料理と豊富なお酒で懇親会。二次会は夜半まで続いた。

翌十一日(日)は生憎の雨、しかし却って紅葉の色も鮮やかで趣もあるというので、予定通り高ドツキヨに向かうことになった。傘

をさしての樽峠への登りではサワガニが沢山這い出していて、かもしかの加田氏らは忽ち数十匹の収穫を上げる。樽峠付近に来るとコミネカエデ、コハウチワカエデ、ブナ、カナクギノキなど紅葉は最高潮である。そしてこれはアントシアン系、これはキサンチフィルまたはカロチン系、これが離層等と各自実地に講義を確かめ、質問もできるというのは、学ぶ者にとつては最高の喜びであった。稜線を歩きながら実物に即してエゴノキ、イヌツゲの太木、あるいはウシコロシ、アカガシ、アマチャヅル、ヤマグルマ、リョウブ、コクサザなど近田先生からいろいろ面白い話を伺うこともできた。雨で滑りやすい急坂を一一三四の高ドツキヨ頂上に登り着いたのは十一時。幸いに雨も止み、先着の沼津かもしか会員による焚火が赤々と燃え、大鍋にはナメコと豆腐のたっぷりはいった心尽くしの味噌汁が湯気を立てていた。缶入酒で乾杯、おにぎりの他、あんぱん、コーヒール、果物、そして坂口荘差入れのきびもちも出て、枝に突き刺

して火にかざすなど、野趣満点であった。食後には山の歌の独唱や合唱もあいつぎ、心ゆくまで山を楽しんだ。

徳間への下山路は雨で滑り易いというので来た道を下山する。次第にガスもはれ、貫ヶ岳や篠井山も姿を見せ、日が射すと紅葉の上に虹がかかっていた。予定通り、三時半にマイクロスパスの待つ車道終点に到着、富士駅には五時に着いて解散となった。

有志六名は更に車で沼津かもしか小屋に向かい、今日とれたサワガニの唐揚げや新鮮な刺身に舌つづみを打ちつつ、他のかししか会員も交えて歓談の後、一泊した。近田先生と、予備調査その他万全の準備とお世話を頂いた沼津か

フリークライミング講習会

指導委員会・青年懇談会

フリークライミング講習会が十月二十日～二十一日に伊豆城ヶ崎で開催されました。講師は昨年と同じく池田功さんをお願いしました。参加者三十四名という大部隊が伊豆急伊豆高原駅に集合した二十日は、あいにくの小雨もようで主催の役員を心配させましたが、会場のファミリークラック・エリアは上部のオーバーハングに守られ壁は濡れることもなく安心しました。池田さんの進行でさっそく講習を始め、まずはストレッチン

もしか山岳会の皆様に改めて御礼申し上げ、報告に換えたい。

参加者 *近田文弘(講師)、*加田勝利、湯山直文、金子誠一、金子しげ子、仁王一成、平井泰、長谷川広司、*庄司長生、佐藤隆男、*小川喜久、武藤泰佐(以上かもしか山岳会員)、岸榮、中垣淑子、久保孝一郎、菅野弘章、砂田定夫、山崎健、富田郁夫、船木威志、中村あや、及川昭、及川弓子、滝沢芳章、宮前淑子、赤松光、根本大、大野規子、中村純二、斎藤桂、梅野淑子、小西奎二、高橋詢、以上三十三名

(中村純二)

グ、うでたてふせ、腹筋の運動でウォームアップし、数班に分散してクラックに手や足を引っこみ、それを手がかり足がかりとして登るジャミング技術の初歩を教わり、ジャミングで数メートルの高さまで登ったり降りたりを繰り返して、その後、ナッツ等の使用法、セッティングの基礎や注意点を教わり、このエリアの各クラックにトップロープでのチャレンジが、屋食の時間も惜しんで続けられました。

紅葉・落葉・腐葉

近田文弘

静岡大、理、生物学教室

紅葉という言葉は辞書で引きますと、樹木の葉が晩秋の寒さに逢う頃、葉緑素が変質する結果、緑色を失って黄褐色となり、また花青素が紅変して紅色となること(広辞苑)とあります。紅葉はまた紅葉とも、黄葉とも表現されます。山の樹々の緑が秋を迎えて、赤や黄に美しく粧うことを言っているのです。

私は南アルプスの植物を幾度か調査しておりますので、今回の話を南アルプスのみで観賞から始めさせて頂こうと思います。今年は台風もなく、また秋に入って冷たい日が続きましたので、南アルプスの紅葉は殊の外美しいようです。赤や橙色の葉はカエデ科の樹木に多く、文字通りの紅葉です。鮮やかな黄色はダンコウバイやカラマツなど、そしてクマの食糧として大切なドングリをつけるブナやミズナラは褐色のもみじです。中には葉の表面は赤いのに、裏面は緑色のままだというマルバウツギのような変わり者もあります。

南アルプスの紅葉を少し遠くから眺めますと、飯豊連峰など北国の山々と違って緑色をしたツガやウラジロモミなど常緑の針葉樹と紅葉した樹々がモザイクのように混り合った様子をしていきます。北国の全山紅葉の方が良いという人もいますが、緑ともみじが綿織りなす南アルプスこそ、という人もあります。

紅葉のメカニズムは、晩秋になって気温が低下すると、葉と枝の間の養分の通りが悪くなり、葉の緑色を作っていた葉緑素が分解されて、もとから葉には含まれていられなくても、葉緑素に被いか

くされていた色素であるアントシアニン(花青素Ⅱ赤色系)やキサントフィル(Ⅱ黄色系)の色が現れることによるといわれます。

花青素は、光合成によって葉に貯えられた糖分を成分のひとつとして作られる色素です。数日の間穏やかな晴天が続いた後、急に冷え込んだ時、紅葉が一段と美しくなるのは、晴天時に葉に糖分が多く合成されたことが原因となっているのです。

紅葉という現象を葉が一時的に緑色でない別のものになるということと考えますと、冬のスギの葉の紅葉や、春のカナメモチの紅葉もそのひとつになります。冬に杉が紅葉することは案外気づかれていないかも知れません。

さて、紅葉の次には、落葉がやってきます。落葉は、葉柄の基部に秋になると「離層」という特別な組織ができて、この離層の所で葉は枝から離れて落ちるのです。私は、シダ植物で落葉を調べたことがあります。シダでは、(1)離層は全くできずに葉が腐って落ちるもの、(2)春のうちに葉柄に離層ができて、ここから落葉するもの、(3)秋に離層ができて落葉するもの、と三つの型があります。ペップファーという人は、樹木の仲間も広く調べて十二の型があると述べています。要は「離層」のでき具合で、色々様々な落葉があるようです。

緑の時を終え、紅の秋を飾ってハラハラと散りゆくカエデ類の葉もあります。枯葉が冬の寒風にカサコソと鳴りながらいつまでも枝に残っているコナラの葉もあります(この種では離層ができないうのです)。また緑色のままで勝手気ままに落葉する不粋なヤマハシノキの葉もあります。葉だけでなく小枝も一緒に落してしまえというのは杉で、クスノキのあの大きな樹冠も小枝を落すことでバランスがとれているのです。

さて、最後に落葉の行方を考えてみたいと思います。

講師のデモンストレーションを見る限りでは楽に登れそうに見える所を何度も敗退を続けているうちに第一日目の講習は終了し、会員の西村さん、小林さん、三沢さん紹介の中村屋保養所に引き揚げました。さすがに中村屋の保養所、いつもの天幕や山小屋での食事とは比べものにならない豪華な食事をすませると、ミーティングが開かれました。ヨセミテや日本の岩場のスライドや昨春のカンチエングのスライドも上映されました。

一夜明けて二十一日は快晴に恵まれ、Tシャツ一枚でも暑いくらいの中、前日と同じファミリークラック・エリアで講習は続き、午後からはおたつ磯エリアに移動し、墜落して海水でおしりを濡らす人

も出てみんなの笑いをさそうなど、和気あいあいとした中、全員怪我もなく三時に解散しました。

なお、中村屋保養所を借りるに当り、会員の西村さん、小林さん、三沢さんの協力を頂きました。感謝申し上げます。

参加者 池田功、池田えりか、小笠原秀園、有益聡、清田久夫、野崎真知子、木島初治、伊藤孝、入沢郁夫、菅井孝作、下田玲二、野田孝敏、大山千尋、小沼由美子、中村太、矢野慎次郎、広野マサ子、青木勝、江波戸等、井上真、横島洋行、志藤聡、小山勉、高橋聡、伊豆山真理、山村学、山崎直人、砂田定夫、小川武、桐生恒治、村木秀男、大谷亮、丸岡博昭、勝山康雄、以上三十四名



図書紹介

写真集・南アルプス

上野 巖著

自称、日曜作家の上野氏。少ない休暇を利用しての南アルプスの山行は、ただですら困難である。それを四季を問わず、写真まで撮

ろうというのだから、これは大変なことである。

彼は、若い時、詩を書いていた。詩という抽象的なものを具象的な写真というものに方向転換しても、やはり、その底にあるものは作品に現われてくるものである。とらえどころのない巨大な対象南アルプスに、何の術もなく正対しているところなど、彼の性格資質といったものだろうか。

そして、サイドカットのさり気ない、草花、滝、森林など、うつかり見おとしてしまい勝ちなモチーフに対する、温かな眼、彼のす

紅葉探索山行講義要約

ます。「腐葉」などと、あまりきれいでない表現で恐縮ですが、落葉はついには腐って土に帰る運命にあります。もし落葉が腐らなかつたら、森は落葉で埋まって、やがて「落葉なだれ」が山麓の町を襲うかも知れません。

冗談はともかく腐葉が大地に栄養を与えるであろうことは想像に難くありません。実際に樹木がどんな栄養を大地に落すかを調べると意外なことが解ってきました。どの種類の樹木も一様に栄養のある葉を落すのではなくて、極く少ない種類だけが窒素を含んだ栄養のある葉を落します。多くの樹木は、秋になると葉の養分を枝に「回収」して、不要になった屑同然の葉を落すらしいのです。私どもの教室の増沢武弘先生が、富士山の森林

限界でこのことを研究しています。それによりまずと、ミヤマハンノキは栄養のある落葉を作って森林の形成に役立っているのに、一方で、同じ所に生えるダケカンバはともケチン坊だとか。

紅葉・落葉・腐葉と、秋の一時をとっても自然は実に多様で一筋縄ではいかぬ面白さに満ちているようです。私の話はいささか泥縄でしたのでこの辺で終らせて頂きます。有難うございました。

参考 南アルプスの森林植生 (静岡大学 昭54年刊)
静岡県の植物群落 (第一法規 昭56年刊)
南アルプスの自然と人 (南ア研究会 昭57年刊)

ばらしい感性をかい間見る。

それと、色彩に眩惑されない、モノトーンに近い、例えば、夏山の北岳、間ノ岳、鋸岳と雲の八ヶ岳、鳳凰山と富士山などに、彼のカメラ・アイと感覚的確さがかがわれる。また、彼の好きだという、間ノ岳のカルから北岳は、やはり出色である。

方時代のさきがけとなるように願うのは、評者のひい気の引きだおしというものであろうか。

昭和五十八年十一月一日 山梨日日新聞社発行 定価三、二〇〇円 (山村正光)

イタリアの山を行く

牧野 文子著

詩人でもある牧野さんの眼が、暖く、ときにはきびしく、イタリアの山旅をつづけて行く。文子さんの童女のような、愛らしく、やさしい声に、全編が静かに包まれているような本である。

この本は四部に分かれており、彼女が歩かれた、北部アオスタ、東北部のセルヴァを中心としたド

ロミティでの山歩き、アルピニアからアッペンニノ山脈。南の靴の踵にあたる地区から、ガルガーナへ。ナポリから海路を南へ、エオリエ諸島を経てシチリアを一周、サルデーニャでイタリアの山歩きの旅は終わっている。そして最後に、トレントで「山の写真展」をみた話から、随所で同行されているイタリア、フイレントツエ生れの人類学者であり、日本山岳会会員でもあるフオスコ・マライーニ氏の紹介と、彼の日本山岳会とのかわりあいの処でぶつんと途切れている。文子さんの絶筆であるからだ。

五十八年六月八日に逝去された文子さんの遺稿を主人の四子吉氏がまとめられてこの本は出版された。みひらきに張られた白い紙片に、「謹呈 文子の思い出に 牧

野四子吉」とあるのが胸に痛い。万感の想いをこめた愛妻への鎮魂の書でもある。また四子吉氏のスケッチ、文子さんの詩が随所に挿入されており、読者を楽しませてくれる。

私ごとで恐縮だが、私は亡くなる一年前から、親しく、深く、文子さんに接する機会を得た。それも同じ海外委員会の一員として、五十七年六月三日の夜、定例講演会の講師をご依頼したのがおつきあいの始まりだったのである。

当夜、大学ノートにびっしりと話をまとめてこれられ、私は驚嘆のおもいでブルーのインクの、文字の羅れつに見入ったことを鮮明に覚えている。演題は「私の歩いたイタリヤの山々」で、もしかするとこの講演がひとつの契機となつて、文子さんはこの本を書かれたのではないだろうか？

入院を知り、お見舞に伺う積りで電話したら、四子吉さんから、今遺体が帰って来ますと知らされ、茫然と受話器の前でたちずくんだ朝のことを思い出します。

本書の中にある、ロッレ峠という詩の中に「一足ごとに、息をのんで―静寂を破ってはならない―」と、大らかに迎えられる人間でなくてはならない―というところがあつた。

私の人生で出会った、素適な女性の人であった文子さん、山をこよく愛した彼女のこの詩の中

の、この言葉は、彼女の終生の山への姿勢であり人生の信条でもあつたのではないかという気がしてならない。

昭和五十九年二月二十五日 ア
ディン書房発行 二二三ページ
定価一五〇〇円
(早川瑠璃子)

山の絆

青柳 健著

この本の出版記念会は一昨年の十一月二十八日に開かれたが、その案内にはこうあつた。

「(前略) 私たちの親しい友人である青柳健氏が、今度、第三の随想集『山の絆』を出版することになりました。『青春の穂高』、『郷愁の山』以来の二十年間に、雑誌『アルプ』、『岳人』、『山と溪谷』などに書き溜めたものに手を加え、新しく書き下ろした作品も含めた、三二〇頁の厚表紙の豪華な本です。内容は、串田孫一先生の序文をはじめ、『故郷の山』、『アルプ』との日々、『中央アジアの山』、『遠い国の山々』、『創作山』と人、『随想山』の呼び声の六章からなり、美しい版画を添えてあります。(後略)」

六つの章は、この冒頭を、章題を象徴する一篇の詩によつて飾り、夫々の章には、章題を主調とする数篇の珠玉の佳篇が、調和よく配置されていて、山の詩人・青柳健の、ここ二十数年間の登山と思索の集大成たるに相応しい、スマートな作品集ができたが、著者の「健さん」は、私たちが老けるにつれて失つてしまいがちな、山に対する、あるいは登山をめぐる諸々の状況に対する、乙女のようなみずみずしい感情を、いつまでも持ち続けることのできる稀有な人らしい。

というわけで私たちは、この本によつて、そうした、ともすれば移ろいがちな情感に、幅広い体験と深い思索の年輪の重みを担つた筆のもとに接することができるといふ、滅多にない仕合わせを味わえることとなった。

章題の一つにもなされている雑誌「アルプ」と、著者との因縁の深さも知る人ぞ知る。ひよつとしたらこの本は、「アルプ」の「白鳥の歌」であつた、ということになるのかも知れない。

一九八四年五月三十一日 岳書房発行 三一八ページ 定価一八〇〇円 (青木正樹)



特報

祁連山脈登山許可取得

一月半ば中国登山協会の史副主席より今夏中国登山につき会談の招聘のファックスが届き、急拠、佐々会長、宮下、磯野の三名が、二月四日より四日間、北京の中国登山協会を訪れた。会談には喬加欽登山協会主席、史占春、許競副主席、王富洲秘書長をはじめ、胡林、陳榮昌、陳尚仁対外連絡委員等が出席され、大変友好裡のうちにわれわれの熱望していた祁連山脈他、次のような青海省の登山許可の内諾を得た。

殊に祁連山脈は一九五八年に中国登山協会が入山して以来、中国人は素より外国登山家にも開放していない地域で、当初今夏の開放は絶望視されていたが、チョモランマ以来のJACとの友好関係を考慮され、地元甘肅省の格別な協力も得られた。

中国登山協会は一九五八年に中国人は素より外国登山家にも開放していない地域で、当初今夏の開放は絶望視されていたが、チョモランマ以来のJACとの友好関係を考慮され、地元甘肅省の格別な協力も得られた。

ので特別許可が取得出来たものである。

概要は次の通り(登山計画の詳細、費用等は次号に掲載)

一、酒泉より祁連山(五五六四m)及びパンサイル山(五三二九m)の踏査及び登頂

二、青海省のゴルムドよりコンロン山峠を経ての六〇〇〇m

三、黄河の源流、青海省の二つの湖の釣り及び四六〇〇m

四、シルクロードの旅

なお、今夏より新天地の祁連山脈に登山を集中するため、四年間継続したボゴダ山群の山行は終止符を打つことにした。また、二月末迄に計画書をJACの事務局に置くのでお問合せ下さい。(宮下秀樹)

今回の例会は隣同志の山梨の方々と交流をはかるため、会場を道志の民宿清流荘で行なった。

場所が良かったせいか、当初予定した二十五名をはるかに超え、四十七名もの参加申込みがあり、幹事をびっくりさせた。宿に無理を頼み、若い人には寝袋持参という事で懇親会も鉤の手にしなれば収まらず、混雑したが、新調

の特別許可が取得出来たものである。

概要は次の通り(登山計画の詳細、費用等は次号に掲載)

一、酒泉より祁連山(五五六四m)及びパンサイル山(五三二九m)の踏査及び登頂

二、青海省のゴルムドよりコンロン山峠を経ての六〇〇〇m

三、黄河の源流、青海省の二つの湖の釣り及び四六〇〇m

四、シルクロードの旅

なお、今夏より新天地の祁連山脈に登山を集中するため、四年間継続したボゴダ山群の山行は終止符を打つことにした。また、二月末迄に計画書をJACの事務局に置くのでお問合せ下さい。(宮下秀樹)



第7回 丹水会例会

(11・17・18)

東・西
南・北

図書受入報告

図書委員会

昭和 59 年 9 月分受入図書

1. 秋田大学山岳部編「部報 秋田大学山岳部創設 30 周年記念誌」1984 (編者寄贈)
2. 創作社編「千葉工業大学カンジュト・サール峰登山報告1981年」千葉工業大学山岳部OB会 (金子雅信氏寄贈)
3. 三省堂編「コンサイス外国山名辞典 三省堂 1984 (版元寄贈)
4. 解説 黒沢良彦・渡辺泰明, 写真 栗林慧「野外ハンドブック 12 甲虫」山と溪谷社 1984 (版元寄贈)
5. 伊藤有編「アナヴァン 禿博信氏追悼号 No. 5」原病院 1984 (アナヴァン編集部寄贈)
6. 青藏高原登山研究会編「青藏高原 No. 1」1984 (編者寄贈)
7. 浮塚正勝編「雨あがり 第四号 大村理子追悼号」山岳同人梁山泊 1984 (編者寄贈)

昭和 59 年 10 月分受入図書

1. 大内尚樹ほか編著「山の用語なんでも事典」山と溪谷社 1984 (版元寄贈)
2. 浅野孝一著「続・中・高年向きの山 100 コース関東編」山と溪谷社 1984 (版元寄贈)
3. 岩橋崇至著「アルプス大縦走」山と溪谷社 1984 (版元寄贈)

(以下次号)

——北海道支部忘年会——
北海道支部忘年会は、十二月八日(土)午後六時より、札幌駅前通り雪印パーラー地下「ゆき」で開催、橋本支部長始め、藤沢より駆け付けた佐々会長を含め二十九名出席で、盛大に行なわれた。
先ず、橋本支部長より開会挨拶、続いて佐々会長より東京の晩餐会や八十周年記念行事、記念事

(古谷聖司)

した揃いの伴天で皆和気あいあいのうちに、酒びんの底が見えてくる。
翌日はあまり好天ではなかったが、山梨の人々は丹沢の蘆釣山へ、私共は道志の葉畑山から秋山峠へ三十名を超す大部隊で向かった。
平素ほとんど人の訪れるのもまれなこの山稜も、この日ばかりは賑わったようだ。この山稜、低山の割りに足の便の悪さから、入山者も少なく、厚い落葉の中を静かな山旅が楽しめるよいコースで、何本かのエスケープルートもあり、初冬や早春には藪が少なく歩き良い。時間さえ許せば岩道峠まで足を延ばし、道志七里の長さをゆつくり味わってみたかった。
宿も新築して間もなく、テニスパイムにあやかる道志にあつて、山の人を暖くもてなしてくれる若夫婦とおばあちゃんの家族的な親切さが印象的であった。

出席者 浅利欣吉、平野明、柳田涼子、亀井秀子、野田四郎、井後幸太郎、橋本誠二、石井忠雄、朝比奈英三、佐々木喜一、加藤盛一、兼平治水、横田春雄、沢田長子、大久保五郎、佐々保雄、石崎貞子、赤石喜恵子、織笠巖、久保田優一、河村章人、河村皆子、阿部淳、高橋邦臣、水科行雄、及川敏一、沼崎勝洋、小林年、先川信一郎
(平野明)

業の概要報告と、記念募金応募の一層の協力を要請された。
忘年会参加者は、遠く函館、蘭越町より駆けつけて下さり、集会担当みな感激する。何時もスキーバスでお世話になっている織笠巖さんの音頭で乾杯。前大塚支部長静岡追悼会、今西元会長千四百山記念パーティ、東北・北海道各支部交流安達太良山行、今西元会長の阿寒、帯広、アポイ、遊楽部等の山行、橋本支部長誕生、大雪山黒岳一九八四山行、日高神威岳前大塚支部長追悼山行、真狩山丈莊お月見、年次晩餐会と丹沢大山々行など話題彷彿、来る山岳会創立八十周年記念事業には、大いに協力しようとの会場は盛り上がる。
会員の一言メッセージに続き、二次会「鶴」へ、「モンテローザ」へ、とサッポロはJAC会員の夜となり、例によつて、某会員宅で夜を明かし、星過ぎまで居候を決め込む始末。支部会員の奮闘に次なる期待を込めて萬歳。

●お問合せ・資料請求は……
発行/日外アソシエーツ
東京都大田区大森北1-23-8 千143
TEL 03-7663-5264

ネパール
研究ガイド
解説と文献目録
A5判 480頁 9,800円

(朝日新聞'84.12.3 読書面)

★ネパール研究ガイド
エベレストをはじめ、海拔八〇〇〇以上の、白き神々の座、など、その独特の文化に魅せられてネパールを訪れる日本人は年間二万人。初の本格的な文献目録「ネパール研究ガイド」(川喜田二郎監修、日本ネパール協会編、日外アソシエーツ発行、発売所 紀伊國屋書店、丸八〇〇円)が出版された。
日本で発行されたネパール関係の出版物四千点を十項目に分類しているが、特に自然、探検、紀行・トレッキング、登山の項は質量ともに充実している。

JACC 忘年会

恒例の忘年会が十二月十五日、ルームで賑やかに開かれました。

今年のメダマは、山名のついた日本酒一斗(ちなみに、谷川岳、両神山、妙高山、八海山、立山)。他に、ビール、日本酒、スコッチなどご寄贈いただきました。テーブルいっぱいの手料理(ぶりの刺身、あじのたたき、中華風サラダ、鳥からあげ、チーズとハムの包み揚げ、蒸しぎょうざ、うま煮、ちらし、おむすび各種、いなり寿司、栄養大学の手作りクッキー、果物 etc, etc)で、充分ご満足いただけたものと自負して

おります。参加は、会長、副会長はじめ主催者側を含めて八十名を超え、大盛況でした。

今回はプレゼント交換に替えて、婦人懇談会メンバーが日本、外国の各地で拾った集めたりした思い出の品々を中心に提供していただき、景品としました。大当りは〇〇氷河の石、マサイ族の首輪、ネパールのお面などです。

なお、材料費を差し引いた剰余金、三六、八八〇円は、すべて朝日新聞東京厚生文化事業団「アフリカの飢餓救援基金」に寄付いたしましたので、併せてご報告申し上げます。ご協力いただいた皆さん、どうもありがとうございました。

(総務・集金委・婦人懇談会)

八十周年記念事業募金応募者ご芳名(昭和六十年一月十一日まで、敬称略、順不同)

(二〇口) 藤島 玄(追加一口)
(六口) 鈴木雄二 朝比奈英三(追加二口)(三口) 中川武(二口) 中野和郎 有馬純
宮崎和夫 入沢郁夫 エーデルワイスクラブ 山崎郁郎 川上隆 広瀬由昌 高見和成 式正英 沢村幸蔵 松田 章 山寺義雄 山田圭一 星 勝雄
(一口) 森本市郎 宮本周三 寺本昭一 佐藤富佐雄 広瀬誠 吉中 登 中島 忍 田宮

良一 多野正一 立見辰雄 山田哲郎
応募会員数累計 一二三八名
応募口数累計 三二七八・一口
金額累計 一六、三九〇、六六三円

会務報告

一月理事会

1月11日 午後6時30分
場所 本会ルーム

出席者 佐々会長、田口副会長、田村、神崎、大倉、西村、河村、松家、長谷川、平井、絹川、村木、梅野、高遠各理事、松田、竹田各監事、宮下、嶋原、中村各評議員、岡沢理事代行

委任・欠席 山田副会長、赤松、水野、鈴木、平野各理事、飯野、山口各評議員
審議事項
◎日本大学ヒマルチュリ登山隊推薦について 一九八六年ポストに南校からの計画あり 了承
◎八十周年記念事業について 了承
▽行事分委会 八十周年記念式典記念晩餐会、記念展を八月二十四日(土) 目白椿山荘で開催したい 了承

八〇九月の関連行事で計画中のものは次ぎの通り

▽絵画による登山史 NHK・TV 一時間番組放映

▽絵画による登山史展 主催 NHK

▽会員による絵画・写真展 主催 NHK

▽外国人登山家による講演会 主催 JACC

▽登山分委会 カンチ隊が一月十九日、読売スポーツ賞受賞の予定。ボグダについては二月初旬北京へ交渉に行く

▽募金分委会 募金状況(一・一〇現在) 三二七八・一口 金額一六、三九〇、六六三円 目標達成率八二%、第二次募金目標四〇〇

万円で、期日三月末まで実施する報告事項

◎片山全平氏遺族より拾万円寄付を受けた 長期計画準備金として別途積立てる 了承

◎予算編成の時期なので事業報告と予算を一月二十八日まで事務局へ提出すること

◎一月六日、有志で三島大社へ初詣をおこなった

◎秩父宮学術賞は沼田真氏に決定した

◎新入会員オリエンテーションを三月に開催する予定

◎会員名簿作成については費用も含め検討する

◎静岡支部長より支部・本部間の問題を指摘する書面が出され検討したが、誤解によるものもあるもので会長より説明してもらう

◎海外委員会よりアメリカ山岳会から交流登山の申し出があったので、青年懇談会を中心として進めたい、なお、先方来日時の費用の一部を補助して欲しい旨提案があった。原則として受益者負担であるがこれについては常務理事会に一任することとした。

◎フィルム委員会より外国人向け山岳会紹介パンフレットを作成して欲しいむね要望があり、海外委員会英文の小冊子を作成してあるのでこれを充当することとする

その他、各委員会より報告があった。

・ルーム日誌

十二月

6日(木) 指導委
10日(月) 図書委
11日(火) 婦人懇談会
15日(土) 忘年会

17日(月) 総務委
18日(火) 自然保護委、書評委
19日(水) 三木会
20日(木) 会報編集委
22日(土) 青年懇談会
今月の来室者 323名

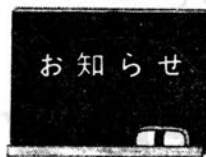
・会員移動

物故
8068 相沢 莊一(7・13)
4049 佐藤 佳年(4・)
8534 後藤 恭夫(12・24)
名誉会員

1334 小原 勝郎
2702 高山 忠四朗
永年会員
1507 早川 義郎
1526 山本 敏三
1549 村田 数之亮

・創立八十周年 記念晩餐会(仙台)

日時 5月11日(土)
午後2時30分より
会場 ホテル仙台プラザ
行事 (1)講演会と映画 2時30分
より(2)晩餐会 5時30分より
会費 一〇〇〇円
申込 〒982-02 仙台市茂庭字中ノ
瀬東五ノ一四 佐々木豊喜
TEL 0223-81-0035



お知らせ

☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

◎日本山岳会高郷 山荘開荘さる

第一回目案内

日本山岳会が二番目の山荘として設けた高郷山荘の開荘式が、十二月八日(土) 福島県耶麻郡高郷村大字峯字利田の同荘で行なわれた。会員と会員家族の保養と登山の拠点として利用するために設けられたもので、同夜は東京からの会員も合わせて約百人が出席し開荘を祝った。開荘式では山荘入口でテープカットを行なったあと、荘内で式典が行なわれ山岳会の菅原広男集會委員長、伊藤尊仁高校山岳会長、矢田目昇会津山岳協会長、斉藤文康高郷村長等があいさつした。地元民らも大歓迎で、同村商工会婦人部から山岸セイ子部

長ら約二十人が手伝いに駆けつけ、高郷自慢の山菜料理、手打ちソバなどをふるまって参加者に喜ばれた。

高郷山荘は県道喜多方―西会津線沿いにある農業小林喜代春さんの旧宅を借りて作られた木造平屋建て約百八十平方メートル、八畳間二つ、十畳、十五畳の和室に流しと風呂場がついている。その内八畳間に一つ、十五畳間に一つのいろりが据ってあり、昔をしのびせる作りになっている。高郷山荘の使用申込みは、日本山岳会事務局で受け付ける。同地は飯豊山、磐梯山、鳥屋山、富士山などが近く、登山基地としても十分利用できる。また近くに各種温泉湯治場がありゆっくりに過ごすこともできる。春には山菜が、秋にはきのこがとれ、溪流釣りの豊饒としても知られる。

利用料金は一泊八百円(非会員は千円) 自炊でシユラフは宿泊者が持参、生活用品は地元で購入するよう希望する。行き方は電車で東北線郡山駅下車、磐越西線で会津若松、喜多方経由荻野駅、

◎第十三回 山岳史懇談会

日時 三月十六日(土)
午後三時
場所 ルーム・集會室
講師 初見一雄氏

テーマ 私の山登りとその頃
今回は初見氏をお招きし、昭和初期に氏の行なった山登りとその周辺を中心に語っていただきます。多数ご参集下さい。

◎オリエンテーション

毎年恒例となっておりますオリエンテーションを今年も左記の通り行ないます。現在より一年前までの開入会された新入会員の方はふるってご参加下さい。

日時 三月十五日(金) 18時30分
場所 JACルーム
内容 会長あいさつ、山岳会紹介
ルーム案内、参加者同志の懇談、終了21時30分
今回は議題にこだわらず和気あいあい、お酒でものみながら楽しくやりたいと思っていますのでお気軽に参加下さい。

◎山岳スキー技術講習会

上越国境の巻機山周辺にて、山岳スキーおよびクロカンスキーによる技術講習をおこないます。

期日 四月十二日(金) 十四日(日)

場所 巻機山(一九六七メートル) 周辺
(盈進学園まきはた山荘泊)
参加費 一万五千元(宿泊費、食費、保険料等含む)

主任講師 小林政志会員
募集人員 三十名程度
申込締切 三月末日
申込先 山岳会事務局
指導委員会

◎第二十八回 紅葉会 第一報

十一月九日(土) 静岡駅集合貸切りバスで梅ヶ島温泉。懇親会をし、ゆっくりに温泉に入る。翌日は安倍峠越えで身延にて解散。希望者は下部温泉へ案内します。懇親会だけの出席も歓迎します。会費 九千円。詳しいことは次報で。

静岡支部 総務

昭和六十年二月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会
発行者 佐々保雄
編集代表 岡 祐吉

電話東京(03) 四四三三
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂